

長谷川宏著<日本精神史>読みだして、「お おもしろい」と新たな人を発見。いろいろな項目がならんでいる、三内丸山遺跡・火炎土器と土偶・銅鐸・・法然と親鸞・正法眼蔵・・と各項目がある。先生は歴史や美術の専門家ではない、その分発想が豊かで面白い、その発想、思惑、夢想をオレは楽しんでいます。

三内丸山遺跡では、ぬぼっと立っている塔、これに目をつけこれを論じておられる。この塔のことは以前から知っていた、栗のでっかい柱が立っていたと思われる遺構が出た、遺構の穴の大きさから、こんなものが建っていたのではという想像で塔が復元された。三内丸山遺跡の敷地内に立っている写真を見たことがある。建造物として利用されたものなのか、象徴的なものなのか、この復元が正解なのか不正解か、素人のオレにはわからないが、考古学の専門家が復元したものなので、まんざら違ってもないだろうと思っている。先生はこの塔の話をしている、紹介します。

建物に近づくと、柱の太さと高さに圧倒される。今から 4500 年も前の縄文人がどうしてこんな巨大な建物を作ろうとしたのか、作ることができたのか。<略>六本の柱は深い穴にしっかり埋め込まれ、三段に渡された横木でがっちり結び合わされて、暴風雨にも耐えうる堅固さだ。直径 2 メートル、深さ 2 メートルの六つの穴を掘るのも大変な作業だったろうが、それをもとにこの六本柱の大建造物を造築するのはずっと難事業だったにちがいない。似た大きさのクリの木を六本切り倒し、枝葉を切り払って柱の形に仕立て、それをここまで運びこんでまっすぐ立てる。作業の一つ一つが多くの人々の協力と高度な技術と適格な全体指揮なくしては前に進みそうにない。

巨大建造物の作られた時期の集落は、数百人の人々が居住する規模に達していただろうが、その人々の共同の思いと共同の行動が形となって表れたのが六本柱の建物にほかならなかった。共同の力と精神は個々人の力と精神の集合体でありながら、個々人の力と精神を超えた、異次元の力として、また精神として存立し、個々人に働きかけてくる。働きかけに応じるなかで個々人は共同の力と精神を大なり小なり担うものとなる。

クリの大木を見つけだし、切り倒し、柱に仕立て、横木でつなぎ、巨大な建造物を作り上げる。構想と、構想を実行に移そうとする意志と、その意志を実現する行動は、いずれも個人の次元にとどまるものではなく、共同の構想であり、共同の意志であり、共同の行動だった。

存在そのものが共同の構想の実現であり、共同の意志の対象化であるような建物は、仰ぎ見る人々に共同の力を実感させるに足る力強さを備えた、堂々たる建造物でなければならなかった。造り上げる過程で人々の実感した共同の力と精神が、建物を見るたびにくりかえし想起できるようでなければならなかった。そういう存在として、六本柱の堅固な木組は地上 20 メートルの高さをもって聳えていた。

縄文人の暮らしは自然に大きく包まれる中で営まれていた。無限の広がりとお行きをもつかに思える自然は、衣食住の恵みをもたらすありがたい存在であるとともに、絶えず生命を脅かす恐れの対象でもあった。恵みと恐れを通して自然の強大さが、日々、体にも心にも感じられるのが縄文人の暮らしだった。

そういう強大な自然に張り合おうとするエネルギーが、人間の精神にはぬきがたく存在する。そのエネルギーがあるからこそ、人間は、自然の存在でありつつ、自然を超えた文明を作り上げてきたし、いまも作り上げつつある。そのエネルギーの普遍性からすれば、人間の、人類の、歴史は、人間と自然の関わりのお有為転変の歴史と言ってもいいほどだ。三内丸山の巨大建造物が示すもの、そういう悠久の歴史の露頭のひとつだ。

強大な自然と張り合うためには、もう少し丁寧な言葉で、自然と張り合うだけの共同の力がひょっとして自分たちのうちにあるかもしれないと感じるためには、共同の力と精神の作りだす構造体は大きく強いものでなければならぬ。<略>自然と張り合うとなれば、作られたものは大きさと強さをもって自然のうちに屹立しなければならない。

四十歳代からの知り合いNさんが、正月にアトリエに来られ、「四国の工場に ホールを造った そこで 展覧会はいかが」といわれた。ありがたい話、早速、四国に行くことにした。Nさんに会い展覧会の目的、趣旨、雰囲気聞き、会場を見、期間を決め、というようなことを話し合うために出かけた。伊予市三秋。四半世紀以上前にお宅に行ったことがある。すこし西寄りの海岸がきれいなところ、海に映った西日のキラキラをいまだに思い出す。

展覧会は、5月の13日(土)～21(日)愛媛県伊予市三秋：共栄木材 13日には絵描きと語る会がある。Nさん「絵と建築、室内の木材」というようなテーマの話が欲しいといわれる。さすがに木材会社のホール、現代建築の木の香り、木の色、木の肌、外は山の斜面、自然林が続く、環境は素晴らしい。

◎前の晩は友人たちがやってきて、しこたま飲んだ。ほとんど日本酒、腹の足しになるものも食わず、お酒をたくさんいただいた。明日は車で出発と言いながらも、加減することもなく酔っぱらった。昼飯を食って、1時頃に家を出た。倉敷に寄れたら寄りたい、と思いつつ、酒の疲れで、1時間ごとぐらゐに休憩。たい焼き、豚まん、そんなものを食って、4時ころに倉敷に入った。

◎倉敷の美観地区を歩いている。大原美術館、喫茶グレコ、川の流れるには大きな白鳥が。一番寒い季節だが、たくさんの観光客がいきかう。黒板に白チョークで字「相場見通し、トランプ政権の、反資本主義、反グローバル政策への懸念から、世界の株式相場が不安定さを増している・・・」「なんだ これ」と横を見れば、黒瓦の同じような木造建築の隅に証券会社の看板がある、なるほどこれも美観地区なり。黒い日本瓦、白い漆喰壁、焼杉の黒塀、ここで一節「いきなぐろべい みこしのまあつにい あだなすがたのあらいがみ しんだはずだよ おとみさん・・・」なまこ壁。なまこ壁がきれいだななんて言っていたが、調べて初めて知った。正方形の黒瓦を壁に貼り付け、白漆喰で盛り上げ、目地を埋める手法がなまこ壁だった。ただ単に化粧で盛り上げているのだと思っていたが、壁に平瓦を貼っていけば、防火にいい、防犯にいい、ということだったんだ。

◎「児島虎次郎 おお 懐かしい名前だ」大原美術館は倉敷紡績の創業者、大原さんが芸大出身の児島に「金に糸目をつけんから 勝ってこい」と集めた泰西名画の数々だと聞いているが、違うかな。

◎四国に渡るには三つの橋がある。明石・鳴門大橋、瀬戸中央自動車道、しまなみ海道。往路は中央道を選んだ。倉敷から橋に入り、与島PAで寝た。外で飯を食うにはあまりに寒い、車の中で一杯飲みながらいろんなものをつまんだ。さすがに前の晩にしこたま飲んでいたので、ビールぐらゐしかほしくない。食欲もあまり出ない。与島PAは四国に入る車しか利用できない、四国から中国方面の車は利用できない、「なんで けったいな仕組みだねえ」と思っていた。上を見上げると、作りかけのコンクリート道が途中で止まっている。工事が資金不足で中断したようである。中央道は列車も通る、時々ゴーツという音がする、「昔 宇高連絡船があった あれが進化したものなのか」朝起きて、ぐるり散歩をした。海がいっぱい、島が二つ三つ、人が住んでいるのかねえ、この木はヤマモモ、貨物船が行く、風がきつい。

◎四国を走っている。満濃池、さぬき、観音寺、「おおお 聞いたことがある名前が・・・」四国にやってきた。5年ぐらゐ前に、石鎚山に登りにやってきた。目的地の伊予市についた。海岸に降りる。島が点々、瀬戸内の海が広がる。過疎の島がたくさんありそう。

◎帰途はしまなみ海道を通った。せっかくだから「大三島で 降りてみよう」と出口を通った。柑橘類が並んでいる、村上三島さんの美術館がある、自転車道がある、車がどんどん走る大きな島だ。

長谷川宏著<日本精神史-江戸の儒学>伊藤仁斎という人は知らなかった。「儒学なんて いやだなあ」と敬遠していた。武士階級の時代になり、今までの公家（公卿：漢字の違う二つがあり、それぞれ意味があるようだが、それは次回に）階級が持っていた権力を奪い取り、祭りごとをするために、彼らを選んだ仕組み、都合がいい仕組み、理論武装する思想ぐらいに思っていた。二千年以上前の中国で、老荘思想も含めて日本に入ってきた考え、武士階級の上も下も一番に勉強したのが孔子の教え、ぐらいに思っていた。

儒学は江戸時代に大きく発展し、<略>中国では前漢の武帝が儒教を国教化し、清末まで 2000 年王朝の体制教学となっていた。

戦国の世の武闘が終息へと向かい、中央集権的な幕藩体制が確立したとき、儒教の統治原理たる徳治主義が身分制度を土台とする社会構造によく適合するものであったことが、何よりも大きな理由だった。徳を身につけ、五倫秩序の確立を目標に人々を教化するのが君子（支配者）の任務だとすると統治思想は、武士階級の自尊心を満足させるものだったし、農工商の被支配階層にとっても、武威をかざして暴力的な支配よりも受け入れやすかった。

- 五倫
1. 父子有親：父母は子女に慈悲深く、寛大で、子女は両親を、敬意をもって奉る
 2. 君臣有義：君臣の道理は義にある
 3. 夫婦有別：夫婦は分別してそれぞれ役割を果たす
 4. 長幼有序：目上と目下は順序と秩序をもって接する
 5. 朋友有信：友人の間には信頼がなければならない

儒教の中の朱子学の壮大な体系は「存在論」「人間論」「修養論」「統治論」が支柱として成り立っていた。

天と地その間にあるすべての事物のもとをなすものが「気」であり、万物のありかたを規定するのが「理」であって、一切は気と理の二つによって成立し存在する。それが朱子学の存在論である。それを人間に適用したとき「理」に当たるものが「本然の性」（人間の本来のありかた、具体的には仁・義・礼・智）と呼ばれ「気」に当たるものが「氣質の性」と呼ばれる。本来は善である人間が外物に接して情や欲に駆られ、悪に染まる。そうやって現実の人間のありさまたる「氣質の性」があらわれる。「本然の性」と「氣質の性」とが矛盾するところに人間論の基本があるとすれば、矛盾をどう克服するかが当然のごとく問題になり、それに応えて次に「居敬窮理」をスローガンとする修養論が提起される。居敬とは、心を敬（つつし）むこと、内なる本性に心を集中し情や欲に惑わされないこと。窮理はものごとの理を窮めること、とりわけ、聖人の言行を記した経書を読んで人として生きる倫理を窮めること。しかし居敬窮理は理想であり、努力目標であって、世の現実、情や欲のぶつかり合う状況を簡単にぬけ出せない。そこで、修養を積み、理を知り、徳を身につけた君子が治者となり、仁（思いやり）をもって統治するとともに、情や欲を脱却できない「小人」を教育し陶冶（とうや＝教育とほぼ同義）しなければならない。それが統治論である。

人間の生き方を大きく視野におさめ、理論面にも実践面にも目をいきとどかせた見事な体系だということができる。

伊藤仁斎 1600 年代 京都の街中の学者。仁斎は「空」「虚」「無」と捉える仏教や道教に対して目の前の現実を、それとは正反対の、欠けるところのない「実」と捉える。

釈迦は空をもって真理とし、老子は虚をもって真理とする。釈迦の考えによると、山川大地はそのすべてが幻想ないし妄想であり、老子によると、万物はすべて無から生じる。しかしながら、天地は遠い昔から常に上空を覆い足元を支え、日月は遠い昔から常に照り輝き、春夏秋冬は遠い昔から常に移り変わり、山川は遠い昔からつねに聳え、流れ、羽のある鳥、毛のある獣、鱗のある魚、裸の動物、上に伸びる植物、地面を這う植物は、遠い昔から常にその形を保っている。

儒教とは難しいものなり。わかりにくい、人が生きていく、その生き方、越し方が述べられている、思っていたよりも、もっと深く、もっと重く、ずっと爽やかだ。「社長」や「親分」が、えらぶるためにあるのではないですぞ。

長谷川宏著<日本精神史>本に仏教の話が続いている。<仏教の受容—霊（たま）信仰と仏像崇拜><最澄と空海と日本霊異記—求道と靈験><浄土思想の形成—仏を念じて極楽に往生する><法然と親鸞—万人救済の論理><正法眼蔵—存在の輝き>

<仏教の受容>：仏教の伝来は「元興寺縁起」では538年、「日本書紀」では552年、百済の聖明王が欽明天皇に仏像と仏具と仏典を送りとどけてきたという。当時の日本では自然神や、祖先神を祀る旧来の信仰、対して仏や仏像を拝むのは明らかに質の違う信仰の形態だった。日本の原始・古代のさまざまな宗教意識や美意識を振り返っても、美しく整った仏像を祀り拝むという信仰の形は類例が求めがたい。「崇仏派」蘇我氏、「排仏派」は物部氏、両派は対立し、戦い、崇仏派が勝利した。

本居宣長著<古事記伝>（この文章は前にも書いたがもう一度）

カミとはなにかといえ、古代の文献に出てくる天上界や地上界のさまざまな神を始めとして、神社に祀られる御霊も神という。また人はもちろんのこと、鳥、獣、木、草や海、山やその他、どんなものでも、並外れた特別の威力を持ち、畏怖せざるをえないものを神という。特別というのは、尊いこと、善いこと、手柄となること、悪いもの、得体のしれないもの、並外れてせまってくるものも神という。

善い威力なら力の発揮を願い、悪しき威力なら力が自分に及ばないことを願う。そのような願望を抱いて神と向き合うことが神を祀ることだった。あたりを掃き清め、供物をささげ、楽を奏し、手を合わせ、頭を下げた。

6・7世紀にかけての日本仏教史にあつては、造寺・造仏をめぐっては精力的な動きがみられ、数々の優れた作品が生み出されたが、仏典の理解、宗教的思索、仏道修業といった方面では注目すべき活動がほとんど見られない。近年の聖徳太子研究で「十七条憲法」が後世の偽作「三教義疏」が中国の文献だったりする。

造寺・造仏：「法隆寺」の「百済観音像」「中宮寺」の「半跏思惟像」少し時代が下がって、「薬師寺」の「聖観音像」「金銅薬師三尊像」この話になると、オレもがぜん生き生きする。近所の奈良の話、何度も行った、見た、素晴らしいの一語に尽きる。先生が絶賛する以上にオレはこれらの寺や仏像が好きだ。

<最澄と空海>

◎最澄 767年～。19歳、東大寺戒壇院で大僧（正式僧）となった。当時の仏教界、政府主導の大事業、地方に国分寺、奈良に東大寺が建立され、皇族や有力豪族が率先して仏教への接近を積極的に展開する。その結果、仏教界の勢力が大きくなり、寺院や僧団にさまざまな特権や特典が付与されるようになった。さらなる勢力の拡大を目指して特権や特典を利用し悪用する傾向が仏教界の内部に確実に広がっていく。最澄の激しい自己糾弾「愚が中の極愚、狂の中の極狂、塵秃の有情、低下の最澄」そのあと、最澄は12年間比叡山にこもった。

「三一権実」 東大寺、法相宗の僧との論争 三乗の教え：衆正をその素質・能力の応じて悟りへと導く三種の教え。一乗の教え：一切の衆正を悟りへと導く唯一の教え。最澄は天台教学の立場から「一乗の教え」こそが真実だとした。これは、人々がいかにして悟りに至るかについて、異なる考え方の論争。最澄の天台教学では、一切衆生（しゅじょう）の悉皆成仏を説く「法華経」により、すべての人が悟りを開くことができ、仏になることができる。

◎空海 774年～。空海は最澄とともに、遣唐使の一行にまじり唐へ渡り、密教を学んだ。帰国後は高野山に金剛峯寺、京都に東寺を与えられ、密教の根本道場を開いた。密教は現世利益をもたらす加持祈祷の仏教として支持を集めた。降雨、病氣平癒、安産、降魔、国家安泰など種々雑多なご利益がある。加持祈祷の背後には雄大な形而上学的理念体系が控えている。大日教と金剛頂教を根本経典とする真言宗をひらいた。

「即身成仏論」第一の命題：世界の構成原理 六大とは「地・水・火・風・空（物質的原理）・識（精神的原理）」六つの原理は自由自在に行き来し常に調和を保っている。第二の命題：万物が調和し、人間もその中に包み込まれゆったり安定した状態にある。その調和のありさまを諸仏・諸尊の配合図として描いたものが曼陀羅図だ。第三の命題：「三密加持すれば速疾に顕わる」三密（身・口・意の三つの玄妙な働き）が仏と衆生との間で感応するようになれば即身成仏が完成する。手に印契を結び、口で真言を唱え、心が仏の心境に達するなら、即身成仏が現実のものとなる。

最澄の天台教団、空海の真言教団。二人の思索は、日本仏教界がインド・中国の傘の下から抜け出し、独自の仏教思想の世界を作りつつあった。海を越えてやってきたきらびやかな仏像に衝撃を受け、崇仏派が勝利したのち、仏寺・仏像の造立や写経の活動を経てきた。それから 250 年のちの平安初期の段階で、二人の登場は多種多様な経典に正面から向き合い教えの本質がどこにあるのかを問い、教えに従って生きるとはどういうことかを考えるに至った。

◎最澄は実践的にも思想的にも、他宗派との厳しい対立と抗争の中に身を置き、対立と抗争をばねに、おのれの思想を深め確かめていった。

◎空海は心身を極限の緊張に耐えうるまでに鍛え上げることによって、宇宙の全存在と融合・合一の実感に達するとともに、他方、知的な好奇心と構想力を自在にはばたかせることによって、仏教の枠を超え出るような思想体系を構築しようとした。

<浄土思想>

極楽浄土への思いに明確な方向性を与えたのが、延暦寺：天台宗の僧：源信の「往生要集」。世に出たのが、平安中期の 985 年だった。最澄と空海の仏教思想は、あの世や極楽にかかわるものではなかった。最澄が自他に課した厳しい山岳修行は、この世で悟りを開く修行・修学だった。空海もその点は変わらない。僻遠の地での山林修行、密教風の厳しい肉体鍛錬は、超自然の呪力の獲得や、即身成仏をねらいとするもの、この世における人間精神の種々相を網羅的に論じようとするものだった。源信の「往生要集」は人の生まれて死ぬまでの現実の世界より、死後に生きるあの世に目を据え、ものごとを考えていこうとする仏法書だった。

◎「地獄」阿鼻地獄の城は・七重の鉄城、七層の鉄網を備え、下部には十八の隔壁が・獄卒は十八人いて、悪魔のような頭をし、夜叉の口をしている。六十四の目があって、そこから鉄球が飛び散り、曲がった牙が・

◎「浄土」その世界は地面が瑠璃でできていて、道の両側には金の縄が張られている。地は平たんで高低がなく、広々とどこまでも広がっている。明るく輝いて清々しい。地面には妙なる衣が敷かれ・

地獄の様子、平安朝の人々はこんなおどろおどろしい世界が死後に待ち受けていると信じただろうか。悪事を働いた罰としてこんな地獄に送り込まれると信じた人は少なくなかったと思う。恨みを抱いて死んだ人間の崇りを恐れ、死者の怨霊をなだめるための祭り<御霊会>を盛んに行っていた時代のことだ。往生要集では地獄を逃れ、極楽に往生する念仏の方法を説く。「南無阿弥陀仏」の名号を唱えるだけでなく仏を念じる、深く思うこと、仏を観じること、観想する、仏の姿をありありと思い浮かべることだ。

◎極楽往生こそ阿弥陀仏の功德の最たるものであり、その功德にあずかる根本の方法が念仏であるとして、源信は、そのやり方を詳しく解説しただけでなく、みずから極楽に往生することを切実に願い、志を同じくする人たちと結んで念仏の行に打ち込んだのだった。浄土思想の強い影響下で造営された寺院・庭園、宗教と美のかかわりあいは、たんにイメージとして思い浮かべられる次元を超え、物としての具体性を帯びてくる。平等院鳳凰堂（キンキラにきれい）・浄瑠璃寺（木津川市加茂-鄙びているがきれい）…。美が何より五感にうったえ、五感の受けとめるものだとすれば、極楽往生を願う人々が鳳凰堂で阿弥陀仏を拝んだり、庭園を散策したり、外から庭や建物を眺めたりするとき、自らの感受する美しさを、それこそ極楽浄土の美しさだと思うのは不自然なことではない。

<法然と親鸞>

源信の往生要集などの影響のもと、10~11 世紀にかけて貴族や僧侶の間で急速に広がった浄土思想は、それから 100 年以上の時を経た、平安末、鎌倉時代、民衆の浄土思想が登場する。新しい宗教の登場である。源信の往生要集では念仏の大切さは強調されていたが、法然はここでその議論をさらに先鋭化していく。源信にとって念仏は文字通り「仏を念じること」であり、念じ方としては阿弥陀仏の相好を思い浮かべること、極楽浄土の壮麗豪華を思い浮かべることが重視された。法然が仏法を中心におく称名念仏は、仏の名号を称えること「南無阿弥陀仏」と口に出して言うことだけでよし、ただそれだけが大事だとするのが法然の思想の核心である。

◎法然 1133 年～。美作（岡山）父は地方官人。9 歳で一家離散ののち出家。弟子の才覚を見た住職は比叡山に送る。

法然が山修山学のため比叡山に登ってから、専修念仏の思想をわがものとし、東山に移るまで 30 年経過している。智慧高才を頼みとし、多聞多見を求め、持戒持律を生きる指針として、（造像起塔はなかった-仏の道に生きる者の大切な四つ）求道の日々を送ってきた。その法然が、それらの四つを捨て、称名念仏だけが唯一の価値のあるおこないだという。万人救済の熱い願望が仏教の伝統を否定し自分の過去をも否定する思想へと行きつくのを見た時、法然は目も眩むような思いがしたに違いない。専修念仏の思想は、富、智慧、才能もない人々を救おうとする思想であり、論理である。思想そのものが人々に触れ、人々に伝えることを求めている。求道者は求道者であり、人々と交わり、人々と共に生きるのだからなければならない。法然の教えがしだいに広がっていったのは言うまでもない。乱世を生きる人々の極楽往生の願いの強さ、称名念仏という易行のみによって往生できるとする専修念仏の思想が、多くの人々に安らぎと喜びをあたえた。貧しく、愚かで、ものを知らず、不正を犯す普通の人々にとって、胸に迫る新しい教えだった。

◎親鸞 1173 年～。貴族の子として生まれる（法然は 41 歳）。9 歳で出家、のち比叡山で堂僧を勤めた。法然の思想を受け継ぎ、それを内面的に掘り下げていったのが、親鸞だった。

●歎異抄の一節<悪人正機説>善人なをもて往生をとぐ、いはんや悪人をや。しかるを世のひとつねにいはく、悪人なを往生す、いかにいはんや善人をやと。この条、一旦そのいはれあるににたれども、本願他力の意趣にそむけり。そのゆへは、自力作善のひとは、ひとへに他力をたのむころかけたるあひだ、弥陀の本願にあらず。しかれども、自力のころをひるがへして、他力をたのみたてまつれば、真実報土の往生をとぐるなり。煩惱具足のわれらは、いずれの行にても生死をはなるあるべからざるをあわれみたまひて、願ををこしたまふ本意、悪人成仏のためなれば、他人のたのみたてまつる悪人、もとも往生の正因なり。よて善人だにこそ往生すれ、まして悪人はと、おほせさふらひき。

◎往生が難しいかに思える悪人こそが真つ先に往生するのでなければならない。この世では逆説に見える論理こそが弥陀の本願にかなうあの世の絶対的な宗教理論だと親鸞は考えたのだ。当時世相は乱れ、汚濁に満ちている。しかしそれでも人々はそこで何とか正しく生きようとし、安らかに生きようとする。努力は報われる、人に迷惑をかけないように、と生きる人々には逆説の論理が提示された。飢えと破壊と略奪と殺戮が繰り返され、場所によっては弱肉強食と身分差別の論理が横行するこの世に対して、阿弥陀の慈悲に守られたあの世では、だれもが安楽に暮らせる、とりわけ重い罪を犯した悪人が安楽に暮らせるという、明晰な理論で語られる二つの世のちがいは誰にでも理解できるし、乱世に苦しみ悩む人々にとって、弥陀の本願がいよいよありがたいものに思えたに違いない。

●歎異抄の一節<他力本願 訳>この親鸞の場合には、「ただ 念仏を唱えて 弥陀に 助けられるのが よい」と法然さまがおっしゃったのをそのまま信じるだけのことです。念仏が本当に浄土往生の原因であるのか、それとも地獄に墮ちる業因であるのか、私はまったく知らない。法然さまに騙され、念仏のおかげで地獄に墮ちたとしても、少しも後悔はしない。なぜなら、念仏以外の修行をして仏になるはずだったが、念仏を唱えたために地獄に墮ちたというなら、騙されたと後悔することになるだろうが、どの修行も達成できない私は、地獄行きの定めだと思えるからです。

◎法然は生身の人間として親鸞が師弟関係を結んだ相手だ。ともども僻地の地に配流された間柄だ。法然が生身の人間である以上、法然に騙されて地獄に墮ちる可能性はゼロではない。ゼロでないのが現実の人間関係のありようだ。親鸞はここで、阿弥陀仏を信じるように法然を信じようとしている。他力本願の構えを取っている。

「この愚かな親鸞は、愛欲の海に溺れ、名利の山に踏み惑い、正定衆（しょうじょうしゅう-極楽往生を約束された人）の仲間になることを喜ばない・・・」親鸞はおのれの生き方を、非僧非俗と名づけ、高遠にして難解な議論を展開するおのれが、決して品格のある清らかな人間ではないと自己糾弾する。親鸞は宗教的信仰の世界と人々の生きる現実世界との隔絶を、改めて確認しているように思われる。人は、はからいなしでは日々を生きていくことはできない。この現実生活は、宗教的信仰の絶対性からすれば相対的なものにすぎない。相対的な生活には観念的な絶対性では汲みつくせない独自の意味と価値がある。そう考えるのが非僧非俗を自任する親鸞の立場だった。

長谷川宏著<日本精神史><正法眼蔵(しょうぼうげんぞう)ー存在の輝き>いよいよ難解なところに来た。何度か別の本をパラパラめくったがチンプンカンプだった。この先生に良寛さんのことも書いてほしいと思う今。

日本仏教は「仏を信じる心」と「美しい伽藍・仏像・画像」を求める美意識の働きの大きさが違った。鎌倉新仏教の登場とともにそのところが大きく変わる。宗教的な信仰と思索が前に出て、美への関心が背後に押しやられる。何百年ものちの東西本願寺の豪壮な大伽藍は、親鸞の思想とは似ても似つかぬものというほかはない。源信の往生要集は地獄と極楽のさまを強烈なイメージとして描きだし、読者の脳裏に焼き付けようとするものだった。そのイメージは視覚だけでなく、聴覚にも、嗅覚にも、触覚にも訴えて地獄の醜悪さと極楽の美しさを印象付けようとするものだった。人々の浄土への思いは、建築、彫刻、絵画によってイメージが具体化されることで、いっそうゆたかになった。法然や親鸞の課題、救済の論理は、多様な仏教思想を学ぶ中から、人々の極楽往生の願いに応える独自の論理と倫理を、思考力と洞察力の限りを尽くして構築していかなければならなかった。同時期に旧来の仏教の側では、三十三間堂やその本堂には千一体の千手観音像を置くという、途方もない美の造形を目指す事業だった。重源の東大寺再建も同時代だ。鎌倉新仏教の一つ、曹洞宗の開祖たる道元もまた、思考の宗教者だった。

●諸方の仏法なる時節、すなわち迷悟あり、修行あり、生(しょう)あり、死あり、諸仏あり、衆生あり。

◎あらゆる事物がそれぞれ真の存在としてある時、そこに迷いや悟りがあり、修行があり、生があり、死があり、悟りを開いた人があり、悟りに達しない人がある。悟りも迷いも、生も死も、仏法のうちに包摂されてある。

●万法ともにわれにあらざる時節、まどひなく悟りなく、諸仏なく衆生なく、生なく滅(めち)なし。

◎全現実が我において主観的にあるのではなく、それ自体においてある時、まどいも悟りもなく、悟りを開いた人も開かない人もなく、生も滅びもない。この二つは同じ心理顕現のさまを表現しているが、あとに続く文は正反対の形をとっている。迷いがあり悟りがあり、生があり死があるのは現実の真相であり、とともに、迷いなく悟りなく、生がなく死がないのが現実の真相だというのだ。矛盾した言い方をしても、迷いと悟り、生と死を相対化し、迷いと悟り、生と死がともどもあり、かつ、ともどもない現実を、大きく受け入れようとするのが、道元の立場だ。

●仏道もとより豊儉(ほうけん)より跳出せるゆへに、生滅あり、迷悟あり、生仏あり

◎仏道とは、量の大小を超えている(大小の問題ではない?)だから、生死があり、迷悟があり、衆生諸仏がある。

●しかもかくのごとくなりといへども 花は愛惜にちり、草は棄嫌におふるのみなり。

◎仏道とはそういうものであるけれど、花が散るのを惜しみ、草の茂るのを嫌うのが人情というものだ。こうして、愛惜の情や嫌厭の情も大きく仏道ないし仏法のうちに包摂される。一般的には、迷いのあとの悟り、衆生の上に諸仏がある。道元の目には迷いや衆生が悟りや諸仏と同等の資格をもって存在するといってもいいかもしれない。

●自己をはこびて万法を修証するを迷いとす、万法すすみて自己を修証するはさとりなり。迷を大悟するは諸仏なり、悟に大迷なるは衆生なり。さらの悟上に得悟する漢あり、迷中又迷(いうめい)の漢あり。諸仏のまさしく諸仏なるときは、自己は諸仏なりと覚知することをもちいず。しかしあれども証仏なり、仏を証しもてゆく。

◎自己の方から事象の認識へと向かうのは迷いであり、事象が自己をとらえるようになるのが悟りだ。迷いを迷いだと大きく悟っているのが仏たちであり、悟りの状態にありながら自己にこだわるのが衆生だ。さらに言えば悟ったうえでさらなる悟りを得る人もいれば迷いの中でさらに迷う人もいる。仏がまさしく悟りの境地にあるときには、自分が仏だと自覚する必要はない。とはいえ、仏であることは事実で、仏としての実践がなされる。迷いの中に悟りが、悟りの中に迷いが、迷いの中にさらなる迷いが、悟りの中にさらなる悟りが、見えてくる。そういう心の動きを動きの中で思考を働かせ、言葉に表現していく。

●心身を挙して色を見取し、心身を挙して声を聴取するに、したしく会取すれども、かがみに影をやどすがごとくにあらず。水と月のごとくにあらず。一方を証するときは、一方はくらし。

◎心身を集中して物の形を見、音声を聞き取るとき、直に形や音声を受け取ったとしても、鏡に姿が宿ったり、水に月が映ったりするようなわけにはいかない。形や音声を対象とする時、対象を受け取る側の様子は見えてこない。西洋近代認識論では、「色」や「声」を客観、それを受け取る方を主観と図式化するが、道元は同じ図式を用いつつ、主観と客観を同位同格のものとは考えない。一方が明るいとき他方は暗い。そういう対立物として、主客はともに仏法のうちに包摂されている。

●仏道をならふといふは、自己をならふ也。自己をならふといふは、自己をわするなり。自己をわするといふは、万法に証せらるるなり。万法に証せらるるといふは、自己の身心および他己の身心をして脱落せしむるなり。

◎日々迷いに迷うその自己が悟りを得るには、自己をみつめ、自己と万法との関係を見つめ、自己への執着を脱し、自分を外へと解き放って、万法と一体化するのだからなければならない。それが仏道修行だ。上記のこれら、仏道の本質をひたむきに追尋する議論は、抽象の極ともいうべき稜線を歩む。道元の向き合う世界の豊かさ、そこに分け入る道元の思考の雄勁さが伝わってくる。<ここで「抽象の極」という言葉が出てくる。まだまだ何のことやらわからない部分が多いが、これらの思考が、抽象的に相対的に、揺れ揺られ、進行していく様がなんとかわかってきた。>

●行持-現代語訳：仏祖が学んだ道をたどると、日々この上ない行の連続で、途切れるということがない。発心と修行と悟りと涅槃の境地との間に、隙間が全くなく、日々行が輪をなして連なっている。だから、日々の行は自ら強いておこなうものでも、他から強いられるものでもない、純真無垢の行である。日々こうした行のおかげで、自己も保たれ、他者も保たれる。根本にあるのは、おのれの行がそのまま全地全天に及び、何もかもがその恩恵に蒙ることだ。他人も自分もそのことに気づかないけれども、それはそうなのだ。だから、仏祖たちの行があつて私たちの行が実現し、わたしたちの仏道が開かれるし、わたしたちの行があつて仏師たちの行が実現し、仏師たちの仏道が開かれる。わたしたちの行によって仏道は輪をなしてつながっていく。

◎道元思想の核心には「只管打座」ひたすら座禅を組むこと、という言葉が位置するが、座禅を本体とする日々の行は、道元にとって、他人とつながり、全世界とつながる実践に他ならなかった。仏祖たちの行と、いまを生きる修行者たちの行のつながりこそ、仏教本来のつながりであることは言うまでもない。われらの行は日月星辰を、大地虚空を、個人の外界と内面を、大自然・大宇宙を真に現出される力を持つとまでいうのだ。

寺田透：僕にとって正法眼蔵の思想のうち一番魅力のあるのは、この世界のすべてのものはすべて同時に現実化されているのであって、それも現在あるものについて言えるばかりでなく、一切の時間の中の存在が同じようにすべて隠れるところなくわれわれの前に現れている、とする思想である。この場合道元の表現は実に巧みでかつ強く、ほかでもない道元自身がそのすべての外にいるのではなく、その中に入っているということを示している。

◎時間的に隔たったものを含めて、すべてのものがこの世界に現実化されているとすれば、この世を超えたところに絶対の世界を想定する必要がない。悟りも解脱も浄福も救済も、あの世のこととしてではなく、この世に現実化されているものと考えることができる。道元の存在論は突きつめるとそういうところに行くはずで、実際「正法眼蔵」では、あの世、彼岸、来世に言及されることがほとんどない。この現実の中で真実を追い求め、真実を明らかにするのが思索の仕事だと、文章の運びそのものが語っている。その意味で道元の仏教思想は、現実のただなかに生きる現実肯定の思想だった。

●現成公按-現代訳：魚が水を泳ぐのに、どこまで行っても水の果てはない。鳥が空を飛ぶのに、どんなに飛んでも空の果てはない。魚や鳥は水や空を離れることはない。水や空を広く使う必要があるときは遠くまで行き、小さく使うだけのときは近くを動く。魚がもし水を出ればたちまち死んでしまう。鳥がもし空を出ればたちまち死んでしまう。以水為命（水が命である）以空為命（空が命である）であることがわかる。以魚為命（魚が命である）以鳥為命（鳥が命である）ともいえる。また以命為魚（命が魚である）とも以命為鳥（命が鳥である）ともいえる。こうしてさらに先へ進むことができる。

◎現実のすべてが存在の輝きをもって現れ出る世界は、融通無碍の思考によって洞察され表現されるものにほかならない。思考が融通無碍の動きによって現実の世界に肉薄するとき、現実の一つ一つの存在が新鮮な輝きをもって現れてくるのだ。修学・修業の中で自己と仏祖がつながり、やがて自己が忘れられていくように、同じ修学・修業のなかで自己と世界が、自己と全自然が、自己の一つ一つの存在がつながり、やがて自己が忘れられていく。池に魚が泳ぐのが見える。空に鳥が飛ぶのが見える。わたしたちの目は、鳥を追い魚を追う。が、水がなければ魚は生きられず、空がなければ鳥は生きられない。そう考える時、魚の向こうに水が、鳥の向こうに空が、価値あるものとして現れる。さらな魚と水、鳥と空との関係そのものへと考えが及べば、そこに行き交う命が価値あるものとして現れ出る。そのような魚、鳥、水、空、命、のあらわれが存在の輝きにほかならない。驚くべき自由な、自立した思考だが、道元はそれが自分だけに特有な思考でなく、万人に共有された思考だと考えていた。思考とは本来そのように自由な自立した運動体だと考えていた。そう考えていたからこそ、存在すること、そのことが価値であるような現実空間をのびやかに動き回るおのれの思考の軌跡を、くりかえし倦きることなく人々に提示しようとしたのだ。

王朝の世界が衰退し、武士の支配力が強まる激動の時代を生きた道元が、世の乱れや人心の荒廃を身近に経験しなかったはずがない。濁世の実感を持たなかったはずがない。その実感をもとに、穢れたこの世とは次元を異にするあの世を遠望し、万人が、とりわけ救いから見放された人々が、そこに迎え入れられることを希求するというのは、道元の選んだ道ではなかった。悲慘に満ちた乱世にあっても人々は生き、社会は動き、大自然は存在している。どんなに乱れた、濁った、穢れた世であろうとも、人々は生き、社会は動き、大自然は存在していることは、そのこと自体が価値のあることではないのか。そこに、生きる意味と価値を見出すべきではないのか。道元の思考はそのように進んでいった。現実を離れて彼岸に向かうのではなく、現実をくぐりぬけてその奥に向かって突き進もうとした。奥の世界を仏法と名付けるとすれば、仏法の世界は現実と区別される別の世界ではなく、現実が本来の姿をとった世界、現実より一層現実的な世界にほかならなかった。

日本に入ってきた思想・宗教、「道教」「儒教」「仏教」の三つがあるという。その一つというより圧倒的に日本人の中に入り込んだ仏教、人々の心の中に、社会の中に、入り込み一般生活の普通の状態に、当然仏教があるのが当たり前の状態のように、存在してきた。現代社会でも、「日本人は無宗教の人が多い」といわれながらも、アミニズム状態、古代からの、石や木や山を祀ること、儒教を頭において社会生活を営む人、道教を頭において仏教の禪宗を語る人、たくさんある仏教の宗派それぞれを信じ、集い、その宗派を盛り上げる人、様々な方々が居おられる。

世界の仏教、本家インドでは、チベットでは、中国、朝鮮半島では、アジア各国では、残念ながら詳しいことは知らないが、日本に仏教が伝わって 1500 年、その間中国仏教界との交流は細々とあったらしいが、その細々を頼りに、独自の進化を遂げていった、釈迦が聞けば「そんなことは言ってないぞ」「それは素晴らしい 私には考えも及ばんことだ」「ちょっと違うが それもよしかな」というようなことが聞かれるかもしれない。仏教が生まれた時のものが、その考え方、その思想が絶対ではない、時空がどんどん変遷し、1500 年の時が経った、何億人の人々があらゆる土地に立ち、それを見つめる、相対的にそれぞれを考え対処し、宗教の絶対性と対峙していくのが大事な。いずれにしても宗教の一番大切なもの「幸せであること」「生きること」、仏教は歩んでいくのでは。

去年の秋、福井県の山を登っている時、ヒザを痛めました。簡単なところを下りながら、「あれれ やったかな」という程度でしたが、翌日の山の上り下りでどんどん悪くなったようで、それ以来2,3カ月、普段通りに歩けず、「暖かくなるまで 治らないかも」という日々を過ごしました。若いころにも同じようなことがありました。寒さが増してくる季節に自転車で遠くの友人宅へ飲み会の行き返りの際に耳を冷やし、午前中に毎日決まって強い頭痛が3、4カ月続き苦しんだことがありました。いくつかの医療機関に行くと、「わからん」「痛いだけ たいしたことはない」と痛み止めの薬を渡されました。「この痛みの つらいこと たいしたことはないとは・・・」と思っていたが、「その痛みは死に至る病ではない」ということかと苦笑。今回のヒザイタも「春になって 暖かくなれば 治るかな」と暖かくなる日をまっています。皆様の話の中で、頭痛の話、筋肉痛の話、そのほか色々な部位の痛みの話が出てくるが、痛みが本人に襲ってこない限りわからないものだ。痛みは、生きていく活力、気力をそぐものですね。

絵が描ける、次々と描ける、どんどん描ける。これはありがたい、楽しい、われながら素晴らしい限り、と自賛。相変わらず駄作がたくさん、在庫が増える、という状態ながら、あれやこれや描きまくっております。先日もキャンパス用の布をたくさん仕入れてきました。昔、山仲間の澤山さんが繊維関係の仕事柄、知っている布屋さんを紹介してくれ「これで、生涯 大丈夫」と思っていたが、布の大量と思っていたものが少なくなってきた。彼が亡くなった今、「どこか 布屋さん」と思い切って滋賀県高島市の駒田織布に手紙を書いてみた。「キャンパスに できるかどうか わからないが いくつか あるので 見に来て」「この季節 ノーマルタイヤは あかんよ」スタッドレスタイヤを履いた車を借り、湖西道路を走りだすと、比良山のてっぺんは真っ白の雪、「残念ながら今年には行けなかった」と進んでいたら、高島市に入るとあちこちに地面に雪がある。人のつながりは、ラッキーなもの、駒田織布では、いい布をたくさんゲットして持ち帰った。材料がたくさんある、絵の具はある、キャンパスはある、と調子に乗って描いています。「オカムラ よくまあ くっていけるなあ やっていけるなあ・・・」と友人たちから揶揄され、彼らをあきれさせておりますが、「これが まあ なんとでもなるもの」と笑っております。

去年の同時期、この画廊の展覧会が終わったところから、奥に積んである水彩画の整理をしようと思いたち、ビニール袋の束を出してきました。「うまくいった絵も うまうまなかった絵もある」「うまくいかなかった絵を 選び出し 棄てるなり 直すなり しよう」と始めた。十日もあれば、一カ月もあれば、と気軽に始めたが、出てくるは出てくるは、千枚以上の水彩画、ほとんど毎日取り組んだ修正と撮影、夏の終わりころまでかかってしまった。水張りをせずに水彩絵の具を載せると、画用紙が波打つ、ボコボコになる。最終的にはボコボコになるのもやむなし、絵の具を入れた、紙を切って絵に貼り付けた、絵に穴を開け、裏から色紙をあてがった、というような裏技を使って、水彩画の修正が終わった。久しぶりに若いころの絵に接し、オレ自身も若返り、楽しい時間を過ごした。

絵を描くとき、オレの絵のスタイルとは、まずは一筆、次、そして次、一筆が5,6回でできあがるやつがたまにあります。しかもこれらの作品はなかなかいい、思い切りがいい、単純に素直にしかも力強く仕上がっている。ところがどっこい、こんなことはまれでこんなことがいつもあるわけではない。なかなかスイスイとはできあがってくれない、この5,6回を逃がしてしまうと、「ドツボに 落ちる」と表現するが、どうにもならない、次にまた次にと描きこんでいくほどに絵が汚く濁ってくる。ここであきらめ、その絵を捨て、次の新しい絵にかかればいいのかもかもしれないが、それはしない、しつこく追いかけます。しつこく追いかけるのが、良い癖なのか悪い癖なのかこれはわからないが、若いころ「描きこんで 描きこんで」と人からも言われ、自身もそうしてきたので、そのなごりが半世紀も経った今でも身体の半分に残っているのか、しつこく追いかけますねえ。白い画面に5,6回筆をおろした時点で、「この絵は ここで終われない」と烙印を押した絵たちとは、押したり引いたり、しばらく寝かしたり、時間をかけます。白い画面に5,6回筆をおろした時点で、「できた 仕上がった うまくいった」というような清々しいおもいが一年で度々あるわけではなく、ほとんどの絵とは、描いては眺め、描いてはためいき、時間、時間、と絵描きごっこが続きます。

以水為命 水が命 魚のこと
以空為命 空が命 鳥のこと
以魚為命 魚が命である
以鳥為命 鳥が命である
以命為魚 命が魚である
以命為鳥 命が鳥である

道元の話

池に魚が泳ぐのが見える。空に鳥が飛ぶのが見える。

わたしたちの目は、鳥を追い魚を追う。

が、水がなければ魚は生きられず、空がなければ鳥は生きられない。

そう考える時、魚の向こうに水が、鳥の向こうに空が、価値あるものとして現れる。

さらの魚と水、鳥と空との関係そのものへと考えが及べば、

そこに行き交う命が価値あるものとして現れ出る。

そのような魚、鳥、水、空、命、のあらわれが存在の輝きにほかならない。